

---

# 鼠ジジイ

弦 グリ子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鼠ジジイ

### 【Nコード】

N2912A

### 【作者名】

弦 グリ子

### 【あらすじ】

夏のある夜、バイト先の人たちとドライブをした。そこで、おかしな爺さんと出会い、不可解な体験をする。

八月の暑い夜。

A 本社の社員で、他店の副店長であり、

私の彼氏である野村さんと、同僚の山内さん、

それから同じ店の吉田さんと私の4人で、ご飯を食べに行った。

野村さんと山内さんは、新入社員の頃、うちの店に研修に来ていた。それ以来、たまにみんなで会って、遊ぶ仲になっていた。

集合場所であったA店に着いたのは夜11時。

このまま解散かと思いきや、

「山内さんが車買ったし、みんなで試乗しよう」という話になった。

4人は山内さんの新車、キューブに乗り込んだ。

暗く、人通りのない狭山湖沿いの山道を走っていた。

4人は真夜中のナチュラルハイに身を任せ、

「この道出るらしいぞーアハハ！」

「霊でもうんこでもなんでも出てこい！」

などと笑いながら話していた。

しばらく車を走らせていると、

30メートルくらい先の歩道に、こちらに向かって歩く人がいた。

私たちが乗る車のライトで照らすと、

くすんだ黄色っぽいジャンパーを着た爺さんだということがわかった。

フードを深く被っていて、その姿は、“ゲゲゲの鬼太郎”に出てくるねずみ男を思い出させる。

あの人、暑くないのかな？

私は不思議に思っただけで見ていた。

鼠ジジイは、すれ違いざまに立ち止まってこちらをじっと見た。顔をちらりと見ると恐ろしい顔をしている。

私は寒気がした。

ほかの3人は、

「あの爺さん、気味悪いな」

「このクソ暑いのにジャンパーなんか着ちゃって……」

「ボケた爺さんの徘徊じゃん？」

と笑い合っていた。

狭山湖を一周して、また店に戻ると、

山内さんが

「次は野村君のビッグホーンでドライブしよう！」

と言う。

4人でビッグホーンに乗り込んだ。

今度は少し遠くの奥多摩の方に車を走らせた。

私を通っていた青梅の高校を過ぎ、

宮ノ平のコンビニで買い物をし、

くねくねとした山道へ入って行く。

狭山湖よりも暗く、人通りは愚か、車通りも少ない。

明るく笑う私たちや、BGMにしているJudy and Maryのポップな曲調とは相反している。

前方からこちらに向かってくる人がいた。

黄色っぽいジャンパーのフードを被っている爺さんである。

先ほどの鼠ジジイとよく似ている。

「…あ…あれ。さっきの爺さんじゃない…？」

顔が青くなつた吉田さんの言葉を、

「まっさかあ！狭山湖から奥多摩まで、徒歩で来たつてのなあ？さすがに無理だろ！」

と笑い飛ばす野村さん。

ついさつきまで喋りっぱなしだった山内さんは黙りこくっている。

爺さんは歩くのを止め、こちらをじつと見た。

私は顔を見るのが嫌で、顔をさつと伏せた。

「そつだよ！やっぱりの爺さんだよ！」

吉田さんは涙目で叫ぶ。

「そんな馬鹿な…」

野村さんが震えた声で言う。

車は更に山奥へと進んでいく。

道が悪く、車の揺れがひどい。

突然、かけていたBGMが止まってしまった。

「チツ…こないだオーディオ変えたばっかなのにもう壊れやがったか？」野村さんが舌を鳴らす。

助手席にいた私は、何度も再生ボタンを押したり、違うMDに替えたりしたが、全く動かない。

これってさっきの爺さんとなにか関係があるのでは？  
そんな考えが私の頭をよぎり、背筋が寒くなった。

ずっと黙っていた山内さんが口を開いた。

「野村君、帰ろ。」

吉田さんもそれに続く。

「そうだよ、ヤバいって」

「…うん。そうだな。」

野村さんは、側にあった空き地で車をUターンさせ、来た道を戻った。

私は恐怖でがたがたと震えながら、  
車に置いてあったあざらしのクッションを抱きしめていた。

来た道に戻っている筈なのに、  
一向にでこぼこ道を抜けない。

「ね…ねえ、さっきから同じトコ走ってない？」  
と吉田さん。

言われてみれば、さっきからずっと同じ道を走っているようだ。  
道の端にぼつりと立つ、不気味な祠を何度も見ている。

ここを抜けたら助かる。

神様仏様！

生きて帰れるのならなんでもします！

だから、私達を無事に帰してください！

冷静な時でこそリアルリストな無神論者を気取っている私だけど、  
この時ばかりはブルブル震えながら祈ることしかできなかった。

「うわぁ！」

野村さんが短い悲鳴を上げた。

前に目をやると、鼠ジジイがものすごい形相で立っていた。

右手には鎌を持っていて、

それが車のライトに反射し、鋭く光っていた。

「キヤーツ！」

キキーツ！

野村さんが急ブレーキを踏む。

山内さんの声に顔を上げる私。

…そこにはライトで照らされた暗い山道があるだけだった。

「あれ…爺さんは？」

気づいたら、外はすっかり明るくなっていて、  
新青梅街道を新宿方面に走っていた。

Aの駐車場に着いたのは朝の6時。

吉田さんと山内さんが車を降りると、

「じゃ、俺は吉田さんを送るから。」

と山内さんが言う。

私は

「気をつけて帰ってください…」

と返して、二人と別れた。

私の家に着き、

ありがとう、と野村さんにキスをした。

「気をつけて帰って。帰ったら一言でいいからメールちょうだい。」

「ああ…わかった。」

私は車を降り、玄関をくぐった。

「ただいま」  
ぼそつという私。

既に起きていた母が神妙な顔でこちらを見ている。

「あんた…どこ行ってたの？」

「奥多摩のほうにドライブ行った。」

朝帰りはさすがにマズかったな…

と思ったが、母はため息をつきながら、

「無事に帰ってよかったよ。仏壇に手を合わせて、ご先祖様によくお礼を言っておきなさい。」

と言い、台所へ向かった。

母は人より第六感が優れている人だ。それでなにかを感じたのかも知れない。

その後、心配だったので山内さんと吉田さんにメールを入れた。

数分後、吉田さんから無事を知らせるメールが届き、

30分後に野村さん、45分後に山内さんからメールが返ってきた。

みんな無事に帰れてよかった。

私は、母に言われた通りに仏壇に手を合わせ、

安心して眠りについたのだった。

一度、目が覚めた。

その日の夜8時だった。

一日中ねてしまっていたようだ。

折角の休日が無駄にしてしまい、悔しく思った。

後で聞けば他の3人もそうだったらしい。

でも、夕べは貴重な体験をしたから良しとしよう。

そう考え、また布団に潜った。

#### 後日談

野村さんのビッグホンにある、壊れたオーディオは、次の日には何事もなかったかのように動いていたらしい。それから、山内さんの車には鎌かなにかでこすった跡がついていたらしい。

新車を傷つけられた山内さんは

「ふざけんなあのクソジジイ！」  
とものすごい剣幕で怒っていた。

「やめとけやめとけ、怒るとまた来るぞ。」  
となだめる野村さん。

あれだけ怖い思いをしといて、  
数日経ったら笑い話にしている彼らがすごく強いと思った。

#### #4 (後書き)

このお話は、数年前に私が体験した実話です。

『この体験をどうしても誰かに伝えたい…』という想いで、慣れない筆を執りました。

拙い文章でしたが、読んでいただきありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2912a/>

---

鼠ジジイ

2010年10月11日00時15分発行